

次の文章を読み、設問に答えなさい。

「代筆ってほどのことやないよ。こういう風に書いたらいいよって、アドバイスしてくれるだけでいいんやって」岡野が言った。駅からのびるゆるやかだけど、長い坂道。平日昼過ぎの坂道には、人影は俺たち以外にはない。どうして女の子は、面倒なことをごく簡単なことのように人におしつけるのだろう。俺はため息をついて、坂道の先をながめた。坂道を登りきると、大きな道に出る。その道沿いに俺の家、戸村飯店がある。俺の親父の親父、つまり俺のじいちゃんの代から始まった中華料理店だ。

学校の中では、俺は作文が得意ということになっていた。中学校のころから、作文を提出すると教師にほめられたし、いくつかの小さな賞もいただいた。いくつかの作文で賞をいただいたのは、兄貴のおかげだ。人権作文も、読書感想文も、俺のオリジナルじゃない。兄貴が書いたものだった。兄貴は昔から、要領がよかったから、作文を書くのがうまかった。読書感想文なんて本を読みもせず、あらずじに目を通すだけで、書いてしまう。兄貴いわく、作文なんて、教師の喜びそうな言葉と、少し個性的な言葉を並べれば完璧らしい。

俺が佳作をもらった読書感想文。それも、兄貴によって、ものの十分で創作されたものだ。俺が夏休みに読んだのは、学校の推薦図書になっていた太宰治の「人間失格」だった。

兄貴は、「もう、有名な文学作品のあらすじを語る必要はない」という、一文から作文をはじめ、作品の内容にはふれることなく、自分自身は人間合格なのか、失格なのかという精神論を並べて、感想文を仕上げた。それが、①自分の内部にせまった感想文だと、教師たちの絶賛を浴びた。兄貴が作文を書いてくれるのは、決して弟思いだからではない。金もうけのためだ。

兄貴は、小学生のころから、自分の文才に気づいていた。そして、中学生のときから、ゴーストライターをしている。友人たちの作文を引き受けているのだ。作文を書くのは苦手なやつが多いから、兄貴は大いにもうかっている。夏休みには、兄貴は十人近くの読書感想文を書く。ずるがしこい兄貴は、十種類ぐらいの文章と、筆跡の使い分けは、余裕でできる。いろんなタイプの人間になりすまし、ちゃっちゃと作文を書き上げ、そして、その中のいくつかが、賞をもらう。

「そやから、コウスケ手伝ってよ。私の先輩に対する純粋な思いと、コウスケの文章力と先輩情報が加われば、す

ごい素敵なラブレターができるんやって」

純粋な思いを持つてるなら、ラブレターを書くのに協力を求めたりしない。自分ひとりで書くべきだ。

「そんなこと言われても」

②「お願い。ね」岡野は手をパチンと合わせて、俺の目を見た。

家に帰ると、兄貴が荷物の整理をしていた。兄貴は卒業式の次の日から、家を出て東京に行く。わが家は小さく、一階が店舗で二階が住まいである。六畳のぼろい和室に兄貴と俺が一緒に生活している。ここ最近、兄貴が毎日、ちょこまかと引越しの準備をするから、さわがしくて落ち着かない。

まったく、どうして岡野はあんなやつにあこがれるのだろう。兄貴は、確かに男前かもしれない。ごつごつした顔をしている俺や親父とちがって、小さいころから、きれいな顔をしていると周りの人たちにも言われていた。要領がいいから、勉強もスポーツもそれなりにこなし、口がうまいから、教師の機嫌を取るのも、女の子をその気にさせるのもうまい。だから、学校では人気がある。Aでも、最低な人間だ。同じ家に暮らす俺はそれをよく知っている。

「ちようどええ。コウスケ、出前たのむわ。柏木さん家」店に下りていくと、お袋が岡持ちをテーブルの上にのせながら言った。どんなにいいときでも、戸村飯店を手伝うのは、俺だけだ。長男のくせに、兄貴は店に顔を出すことをしない。自分の家のことをさけている。

高校を出たら家を出る。東京に行つて、専門学校に行つて、小説家になる。兄貴はずいぶん前から(a)ダンゲンしていた。そのために、高校一年生のときから、自分の家の店を手伝わず、駅前のコンビニでせつせとアルバイトをして、お金をためていた。作文を代筆して、小遣いかせぎをしているのも、きつと家を出るための資金かせぎにちがいない。冬休みの間に、勝手にアパートと専門学校を決め、引越しの準備を一人で進めていた。

別に東京に行かなくて、専門学校に行かなくて、小説は書ける。だけど、兄貴は専門的な(b)キノウを身につけなくちゃいけないし、最先端の街に行かなくちゃ新しいものは書けないと言う。もちろん、そんなのは口実だ。近場にいたら、結局、戸村飯店をつぐはめになることを知っているのだ。

そもそも、兄貴は小説家なんかを本当に目指しているのだろうか。金もうけのために、作文はせつせと書いているけど、読書をしているところなど見たことがない。国語の(c)セイセキはそれなりにいいけど、兄貴の国語便覧の文豪たちの写真には悲惨な落書きがなされている。親父やお袋のイメージしにくい職業をえらそうに口にして、反論

されないようにしているだけとしか思えない。
なにもかもすべて、家を出る口実だ。

俺と兄貴の仲が良かったのは、いつまでだろう。そもそも、昔は仲が良かったのだろうか。
俺は自分の机を片づけている兄貴を、ぼんやりながめていた。卒業まであと二日。三日後には、兄貴が出て行く。それなのに、ぞっとするぐらい、兄貴がいなくなることをさびしいと思えなかった。どんどん片づいていく部屋を見ても、何も感じない。こんなのでいいのだろうか。

とにかく、明日には、岡野の家に行つて、兄貴のつぽをおすような言葉を提供しなくてはいけない。俺は兄貴の動きを目で追いつながら、少しまじめに兄貴のことを考えてみた。けれど、どんなに真剣になっても、兄貴がどんな人間なのか。何が好きなのか、何に興味を持っているのか。いったい何を考えているのか。情けないぐらい、思いうかばなかった。小説家を目指しているふりをしている。それはわかるけど、本当の兄貴がどんな人間なのか、俺は知らなかった。

だいたい、兄貴との思い出なんて、ほとんどないような気がする。幼いころから、二人で楽しく遊んだなんてことがなかった。一つしか年がはなれていない兄弟なのに、共に行動することがなかったのだ。同じ家に、ましてや、せまつ苦しい一つの部屋で、俺たちは一緒に暮らしている。だけど、会話らしい会話もしない。大きなケンカをしたわけでもないのに、いつからか、必要最低限の言葉しかかわさなくなっていた。

「③お前はなんで、東京行く？」俺はぼそりと兄貴に向かって言った。

「は？」突然、俺に声をかけられた兄貴が、げんそうな顔をこつちへ向けた。

「お前、なんで東京に行くんや」

「何を今さら。小説家になるからやつて、言つとるやん」

「うそつけ」

「ほんまや」

「小説なんて書いてどうする？何か意味があるんか」

「お前はあほやから、わからんやろうけど、ペンは剣より強いんやで」兄貴がおどけて言った。人を見くびつたように軽口をたたく。兄貴のそういうところが、俺は昔からきらいだった。

「なんやそれ。ペンなんかで、なんもできんわ」

「ほんまお前は無知やな。文章で、人を幸せにすることも、人を殺すこともできるんやつて。しかし、そう思ったら、ボールペン作った人は、ノーベル賞もんやな」あほらしい。兄貴の言うことは、いつも中身がない。

「ボールペンが剣に勝てるわけないやろう？文章でじわじわだれかを傷つけることはできるかもしれんけど、だれかを殺すことなんかでけへん。そやけど、包丁なら一発でやれる。大切な人を守るためには、ペンではどうしようもあらへん。非現実的や」

「なんや、コウスケは大切な人を守るために、包丁持つてんの？この二十一世紀に？ニラ切るためやなかったんか。こりやまた物騒やな」兄貴がへらへらと言った。

「お前、料理をあほにすんな。ペンではおなかいっぱいにならんけど、包丁でニラ切つとったら、とりあえずおなかを満たすことができるわ。腹の足しにならん文章書くより、餃子やチャーハン作るほうが、よっぽどえらいんや」俺の言葉に兄貴は「ふうん」と大きくうなずいて、

「親父も同じこと言つとつた。やつぱ、お前が戸村飯店はつくべきやね。④思想まで一緒なんやから」と言った。

こうなった今、俺が店をつぐのは仕方ないことだとは思っている。それでも、勝手に家を出て行く兄貴に、決めつけられたくはなかった。

「ほんまは、先に生まれたやつが、責任持たなあかんのちゃうんか」

「先に生まれたやつ？」

「お前に決まつとるわ。お前はなんで何もしようとせんのか」俺の語気は強くなった。⑤今までずっとおもやも思つていたことが、初めて言葉になつて出た気がする。

どっちが家をつぐかなんて話を、俺と兄貴はしたことがなかった。自分たちの店について、一度も相談したことがなかった。それなのに、自然と俺が店をつぐような流れになっている。もちろん、店をつぐことはそんなに悪いことではないし、それでいいと覚悟はしている。でも、完全に納得はできていない。どこか釈然としないものがある。「別に何もせんことない。お前知らんだけで、いろいろ見えへんところで、俺やつて責任とつてるんやで。それに、先に出て行けるのかつて、長男の特権やん」

見えようが見えまいが、兄貴が責任なんてとるわけない。何一つ、長男らしいことをしてこなかった兄貴がけろりと言った。

「それやったら、次男の特権はどこにあるんや」
持ち物は兄貴のお下がり。一つしか年が変わらないのに、えらそうなことを言われる。その上、面倒なことまでおしつけられる。次男は損ばかりだ。

「なんでや。大きな特権があるやん。先を見て学べる。それが次男の特権や」兄貴が言った。

「お前見て、学ぶことなんて一つもあらへんわ」

「なんでや。俺が失敗したら、ちがうやり方をすればいい。なんとも楽チンやん。うらやましいねえ。俺も兄貴がほしいわ」

兄貴が軽口をたたくのに、俺はカチンと来て、手近にあった少年ジャンプを思いっきり兄貴の頭に投げつけた。至近距離から投げたせいもあって、ジャンプは兄貴の頭の真ん中に命中し、ゴンという音を立てた。

兄貴は低く「いて」と、うめき声を上げたきり、俺に反撃することもなく、だまりこんでしまった。よっぽど痛かったのか、⑥うつむいたきり、動かない。気にはなったが、俺は知らぬ顔をして、自分の机の前にすわった。兄貴は自業自得だから仕方がない。片づけるでもなく、机の上のものを移動させていると、ようやく兄貴が声を出した。

「俺って、やっぱ勝手なんかな」兄貴はぼそりと言うと、よろよろとジャンプを（d）ビロいあげて、俺に手渡した。

「何がや」

「いや、長男やのにさ、面倒なことお前におしつけて、家出て行くなんてさ」

兄貴らしくもない。どうせ、口先だけの言葉だ。俺は鼻で笑ってから、

「そやったら、やめとけよ」と言ってやった。兄貴はそれには答えずに、

「お前は本当のところはどうなん？」と、俺に聞いてきた。

「何が？」

「この店つぐの、どう思っとるん？」

「別にどうも思っとらん」

「どうも思っとらんことないやろう？ このまま家にいて、親父の後をつぐのん、いややないんか？」

「さあな。そりや、兄貴みたいにわがまま勝手に気楽にできるのが一番やと思うよ。でも、普通の神経じゃ、親父が作った店つぶせへんからな」

「そっか。そやな」

⑦兄貴がしんみりした顔になった。こんな神妙な兄貴を見ることはめったにない。まさか、さっき投げたジャンプの打ち所が悪かったのだろうか。不思議そうに俺が顔をながめていると、兄貴は、

「ま、普通の神経やないから、俺って小説家になれるんやな」と、にやりと笑った。Bやつぱり、最低の人間だ。

「そやな。あいつ小説家になりたいらしいからさ、その辺のことをすごいねえ、って書くやろう」

「うんうん。それで？」岡野は目をかがやかせながら、俺の言うことをいちいちメモする。

「ほかにはないの？」

「ほかになあ……」

あいつの欠点はいくらでも出てくるけど、⑧気のきいた言葉は一つも出てこない。

「ちゃんと考えておいてって、たのんだのに」

「そやなあ。でも、ごめん。俺、ほんまに兄貴のこと、知らへんねん。いくら考えても、もううかばへん」

「本気で？」

「ああ、本気や。正真正銘本気で、兄貴のことわからん」俺が降参を示すように、両手を挙げて言うと、

「⑨なんかそれって、かわいいそやね」と、岡野は同情するようにまゆをひそめた。

「そうか？」俺は両手を挙げたまま首をかしげた。兄貴のことを知らない自分のことを、悲しく思ったことなど一度もない。

「そややよ。私、妹と、言うほど仲がいいわけやないけど、妹のことやったら、いくらでも思い出せるよ」

「そんなもんなん？」

「そりやそうよ。一緒におるんやもん。必死で考えなくたって、妹のことぐらいたいたいわかる」

世の中の兄弟は、そんなものなのか。だったら、俺はどうして兄貴のことを、こんなにわからないのだろうか。俺があまりにも無関心のせいなのか。それとも、兄貴がわかりにくい人間だからなのか。と、あれこれ考えていたら、頭に兄貴の書いた作文がうかんだ。夏、俺のふりをして書いた「人間失格」の読書感想文。

「僕も主人公と同じだ。僕だって生まれてきて、すみませんと思っている。人間失格とまではいかないけど、この家の、この町の人間としては、失格かもしれない」兄貴は俺の感想文の中で、そう言っていた。

夏休みに読んだときは、わけのわからない気取った文章だと思っていただけだった。いかにも教師受けしそうな、兄

貴が書きそうな感想文だ。そう感じただけだった。⑩だけど、それだけじゃない。いつからだろうか、なぜだろうか。同じ町に生まれて、同じ家族の中で育っているのに、兄貴を取り巻くものとはちがっていた。

親父は、俺には手も足も出して本気で起こるけど、兄貴には声をあらげてどなることはしない。静かに、ごくたまに注意をうながすだけだ。お袋は兄貴を大事にしている。だけど、何か困ったことが起きると、兄貴ではなく俺にたよる。電球をかえるとき、ゴミブリが走ったとき、お袋は俺の名前を呼ぶ。もちろん、兄貴は正真正銘の親父とお袋の子ともだし、俺と同じように愛情を受けている。だけど、合う合わないはある。血がつながっているからといって、趣味や考え方が一致するとは限らない。

俺と親父がキャッチボールをしているとき、兄貴はスイミングスクールに通っていた。俺と親父がテレビの前にかじりついて、阪神タイガースを応援しているとき、兄貴はそ知らぬ顔で一人漫画を読んでいた。俺やお袋が吉本新喜劇を見て、げらげら笑っているのを、兄貴はきょとんとした顔で見ている。俺やお袋はお好み焼きやたこ焼きをおやつ代わりに食べるけど、兄貴は苦手だ。俺も親父もお袋も、広崎のおっさんたちが家に来ると喜んで、兄貴は広崎のおっさんたちの乱暴な物言いに、いつもとまどっていた。

親子だからって、兄弟だからって、好きなものが一緒というわけにはいかない。話がびたりと合うわけでもない。折り合いがつかないことも、波長がちがうこともある。

自分の生まれた場所に、自分が存在する場所に、合わないのは、どんな気持ちだろうか。

兄貴は小学校のころから、黙々と小遣いをためていた。何のために、どんな思いで、そうしていたのだろうか。

「ねえ、考えてるの？」岡野が俺の顔をのぞきこんだ。

「え？」

「先輩のこと考えてくれてるの？」

「ああ、考えてるよ。すごい考えてる」

俺は岡野の手からペンを取った。⑪兄貴に言いたいこと。言うべき言葉。ゼロではない。

兄貴が発する朝、兄貴の友人が軽トラに乗って来てくれた。友人のトラックで兄貴は東京まで行ってしまう。

「ほんじゃ、そろそろ行くわ」兄貴はちよつとスーパーにも行くような口調で言った。あつさりしたものだ。家を

出るというのに、改まった言葉を発する気はないようだ。俺は何も言わず、ただ兄貴やお袋や親父をながめていた。

少しはさびしさや不安を感じているのか、それともすっきりした気持ちでいるのだろうか、もしかしたら後悔しているのか。兄貴の表情はいつもと変わりがなく、何を考えているのか、わからなかった。

「そうや、俺、書くとしたらパソコンで書くで」突然、兄貴がつつ立っていた俺に向かって言った。

「なんのことや？」

「なんのことやって、⑫わけわからん手紙の最後に、鉛筆でも、包丁でも持つものはなんでも一緒だと思ふよ、がんばって、みたいなこと、書いてったやろう？」

岡野の手紙だ。

昨日、兄貴は予測どおり、数え切れないほどの手紙やプレゼントを女の子からもらっていた。そんな中でも岡野の手紙に目を通したのだろうか。

「いまだき、鉛筆は使わへんな。もしも小説を書くとしても、パソコンや」

俺は何食わぬ顔をして、兄貴の言葉を聞いていた。

「⑬お前もさ、本気で包丁より持ちたいものができたら、言うてくれ。長男の責任感、ミジンコ程度はあるつもりやから」

「意味わかんねえ」

「やろや。お前、国語力ゼロやから」兄貴はにやりといやみな顔で言いすてると、軽トラに乗りこんだ。

Cやつぱり、兄貴はいい好きがないやつだ。何を考えてるかさつぱりわからない。ただ、排気ガスをたつぷり出して軽トラが走り去ったとき、俺は確かに、さびしい。そう思った。

〔語注〕

(瀬尾まいこ「ゴーストライター」より)

※1 佳作：入選作品の次に優れた作品

※3 「人間失格」：太宰治の代表作

※5 国語便覧：国語を勉強するための資料集

※7 釈然としない：すっきりしない

※2 太宰治：有名な小説家

※4 岡持ち：料理を運ぶ箱

※6 げんそうな：不思議そうな

※8 広崎のおっさん：いつも店に来る客

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線 (a) ダンゲン (38 行目)、(b) ギノウ (42 行目)、(c) セイセキ (46 行目)、(d) ヒロ (110 行目) のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 線 ① 「自分の内部にせまった感想文」 (14 行目) とありますが、「自分の内部にせまった」とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

三 線 ② 「『お願い。ね』岡野は手をパチンと合わせて、俺の目を見た」 (26 行目) とありますが、岡野がラブレターを書く手伝いを「俺」にたのんだのはなぜですか。説明しなさい。

四 線 ③ 「お前はなんで、東京行く？」 (64 行目) とありますが、ここで「俺」が「兄貴」に改めて問いかけたのはなぜですか。51 行目から 63 行目までをよく読んで、説明しなさい。

五 線 ④ 「思想まで一緒なんやから」 (84 行目) とありますが、「俺」と「父親」のどういうところが「一緒」なのですか。説明しなさい。

六 線 ⑤ 「今までずっとおもやもや思っていたこと」 (89 行目) とありますが、それはどのようなことですか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自分も料理はきらいなのに、家業をおろそかにする兄のせいで店をつがなければなくなっていることが不愉快だということ。

イ 長男なのに、店をつがずに小説家になるという兄へのいかりはあるが、自分としては家をつぐことを前向きに受け止めていること。

ウ 岡野に好かれているうえ、長男としての責任を取らずに、自分だけの夢を追求しようとたくらむ兄を、ねたましく思っていること。

エ 長男である兄が家をつごうとせず、自分が家をつがなければならない状況になっっていることに、不満が残っているということ。

オ 小説家になると言っている兄の将来に、自分はあやういものを感じ、はやっている店をつがないことを不思議に思っていること。

七 線 ⑥ 「うつむいたきり、動かない」 (108 行目)、線 ⑦ 「兄貴がしんみりした顔になった」 (123 行目) とありますが、⑥と⑦の間で、「兄貴」はどのようなことを考えていたと思われませんか。説明しなさい。

八 線 ⑧ 「なんかそれって、かわいそうやね」 (136 行目) とありますが、岡野がそう思ったのはなぜですか。説明しなさい。

九 線 ⑩ 「だけど、それだけじゃない」 (148 行目) とありますが、ここで「俺」は、「兄貴」の読書感想文を思い返して、どのようなことを感じたのですか。それをもっとよくあらわした本文中の一文を抜き出し、最初の十字を書きなさい。

十 線 ⑪ 「兄貴に言いたいこと。言うべき言葉。ゼロではない」 (169 行目) とありますが、線 ⑧ 「気のきいた言葉は一つも出てこな」 (131 行目) 「俺」が、「兄貴」に対して「言うべき言葉」を持つことができたのはなぜですか。説明しなさい。

十一 線 ⑫ 「わけわからん手紙の最後に：書いてったやろう？」 (178 行目)、線 ⑬ 「お前もさ、本気で：あるつもりやから」 (185 行目) とありますが、これらの言葉で「兄貴」は「俺」にどのようなことを伝えようとしているのですか。説明しなさい。

十二 線部 A 「でも、最低な人間だ」 (34 行目)、線部 B 「やっぱり、最低の人間だ」 (125 行目)、線部 C 「やっぱり、兄貴はいけ好かないやつだ」 (189 行目) と、同様の表現が用いられていますが、「兄貴」に対する「俺」の受け止め方は、どのように変わっていったのですか。それぞれの場面に注目しながら、一六〇字以内で説明しなさい。

十三 「俺」の「ラブレター」と「兄貴」の「読書感想文」は、どのようなところが共通していますか。説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉